

葬送儀礼の変化

愛知県の事例を中心に

Changes in Funeral Rites : A Case Study of Aichi Prefecture

GAMAIKE Seishi

蒲池勢至

はじめに

高度経済成長といわれた時期、すなわち昭和 31 年（1956）から昭和 48 年（1973 年）にかけて、日本の社会は大きく変化した。それにともなう、たしかに葬儀も変化している。しかし、葬儀の変化は高度経済成長時期だけではなく、平成に入ってから、さらにもう一段階大きく変化した。そして、この変化は現在進行中でもある。

葬送儀礼はどう変化したのか。これまで伝承されてきた伝統的な葬送儀礼は、社会変動と生活様式の急変のなかで消滅したのか、あるいは形を変えて継続されているのか。一人の人間の「死」に対する観念は、個人的にも社会的にも変わったのであろうか。両墓制研究に代表される従来の民俗学の葬制研究は、葬送・墓制の儀礼を通して日本人の祖霊信仰や霊魂観念について追求してきた。ところが両墓制の問題が一定の解決をみて、さらに葬儀と墓が急激に変化しだしたとき、新たに「民俗の変容」「葬儀と墓の変容」が課題となった。葬儀と墓は、どこへ向かっていくのか。平成 3 年（1991）2 月に「葬送の自由をすすめる会」が結成され、同年 10 月、相模灘で第 1 回の自然葬・散骨が行われたことも社会的影響として大きかったであろう。「現代」の葬送儀礼と墓に関する主な研究をみると、季刊仏教 38『墓と葬式の自由』[法蔵館, 1997 年], 新谷尚紀編『死後の環境』[昭和堂, 1999 年], 『国立歴史民俗博物館調査報告書 9 死・葬送・墓制資料集成』東日本編 1・2 [1999 年], 西日本編 1・2 [2000 年], 森謙二『墓と葬送の現在 祖先祭祀から葬送の自由へ』[東京堂出版, 2000 年], 山折哲雄・安田睦彦『葬送の自由と自然葬』[凱風社, 2000 年], 国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在 民俗の変容』[吉川弘文館, 2002 年], 井上治代『墓と家族の変容』[岩波書店, 2003 年], 山田慎也『現代日本の死と葬儀』[東京大学出版会, 2007 年], 内藤理恵子『現代日本の葬送文化』[岩田書院, 2013 年] などがある。

国立歴史民俗博物館の『死・葬送・墓制資料集成』は、調査目的として「1960 年代（昭和 30 ～ 40 年代も射程に）の死・葬・墓の民俗の実態の確認と 1990 年代（平成 1 ～ 10 年）のその確認作業を通して、その間の変化の実際を具体的な事例に則して確認し位置づけておくことである」と述べている。この調査結果を受けて関沢まゆみ氏は、葬儀の担い手を A：血縁関係者、B：地縁関

係者、C：無縁の関係者と分け、湯灌や入棺までもC（病院・葬儀社）によって提供されるようになり、それまで血縁関係者や地縁関係者を中心とした労働力提供によって担われてきた葬儀が葬祭業者の商業的サービスによって行われるようになってきたという。「葬儀の商品化」である。また、「遺体と刃物」「猫の禁忌」「死亡場所」といった魔除け伝承に関する報告を分析して、「霊魂観念についても、死霊畏怖の観念の希薄化と死穢忌避の観念の希薄化が進行している」とした。そこから「死者は遺骸と死霊ではなくまさに死体と死者、すなわち霊魂から生命へという認識の変化がおこってきている」とした⁽²⁾。1990年代初期から現代葬儀について研究している山田慎也氏は、「葬儀を死の総合的な変換装置という観点から捉え、現代日本の葬儀と死生観の変容」を追求しているが、方法論において「霊魂と規定せず、死者の肉体を超えて表象される死者の人格、死後も表象される人格と捉える視点は、霊魂の存在についての信念の有無にかかわらず有効であろう」と語っている。山田氏の一番の功績は、はやくに葬祭業者を「葬儀執行の主体」と捉えて研究を進めてきたことであろう。葬具についても着目して、祭壇や「棺かくし」の成立過程について明らかにした意義は大きい。そして、「葬儀の中心儀礼が葬列から告別式へ変化することに伴って、祭壇が死者や喪家の社会的威信の表象として位置づけられるだけでなく、「死出の旅立ち」から「他界への再生とその別れ」を演出する装置として、死のモチーフを喚起させている」とした⁽³⁾。

「現代」葬儀についての研究には、伝承されてきた葬送儀礼との連続と不連続、儀礼の消滅と意味喪失、家族や地域社会の変化と葬儀主体者、葬祭業者の役割と商品化されて消費される葬儀、死霊畏怖と死穢観の衰退、死生観の変容などさまざまな課題がある。これらの問題が今後どのような意味を持つに至るのか、地域ごとの個別事例に則しながら、また家族と地域共同体が崩壊して極度に発展した情報化した社会・都市社会の生活と関連づけて分析されねばならない。内藤理恵子氏の『現代日本の葬送文化』は、こうした志向の中で追求された現代葬儀論であるが、はたして成功しているかどうか疑問が残る。このことについては、後で触れてみることにしたい。また、これまでの現代葬儀に関する研究には、宗教とりわけ「仏教儀礼としての葬儀」という視点が欠落している⁽⁴⁾。

さて、本稿では愛知県の事例を中心にして葬儀の変化について述べるが、明治以降から現代までの葬儀の変化を、次の三つの時期に分けて捉えることにする。

- I 昭和30年代までの葬場中心の葬儀
- II 昭和40年代から60年代までの自宅葬儀
- III 平成以後の葬儀会館での葬儀

現在の葬儀は昭和30年代までの葬儀と比べると、ほとんどすべて変わってしまった、といっても過言ではないだろう。最初に昭和31年の葬儀を具体的事例として報告する。そして、この葬儀がどのように変化したのか、葬列の消滅、霊柩車の発生、葬儀会館の成立、祭壇の成立と変化、葬具の変化と儀礼の消滅、といったことについて述べる。「死」に対する観念の世俗化といった問題にも言及してみたい。

一 葬場中心の葬儀—昭和30年頃の葬儀

昭和31年(1956)3月6日、愛知県春日井市宗法町宗法の自宅でY(女性)⁽⁵⁾が死亡した。文久3年(1863)8月生まれで、享年94歳であった。オツヤ(お通夜)が8日、葬儀は亡くなってから4日目の9日に自宅で執り行われた。一部に葬祭業者がすでに関与していたが、トムライ(弔い)と呼ばれた葬儀の準備から埋葬、埋葬後の儀礼のほとんどはドウギョウ(同行)という葬式組で行われた。

宗法は近世に新田開発されたムラで農業地域であった。県営名古屋空港に隣接していて、現在、都市化が進行しつつある。ムラは図1のように19戸で構成され、行政的な組とは別に長善寺(真宗大谷派、名古屋市西区上小田井)を檀那寺とする真宗門徒の同行と、常安寺(曹洞宗、西春日井郡豊山町木戸)を檀那寺とする禅宗の同行という2つに分かれている。この単位が葬式組で、死亡したYの家は真宗門徒の同行に属している。ムラの西には宗法だけの墓地がある。葬儀の会場となった自宅は昭和45年(1970)に建て直されたが、クズヤブキ(屑屋葺き、写真1)と呼んでいたかつての家の間取りは図2のようであった。後に述べるように、遺体は湯灌をニワで行なったあとすぐに納棺(座棺)され、棺はナンド(納戸)に安置されて、以後出棺までこのままであった。

図3は家の系譜と死者年月日・法名の一覧である。Yは土葬であったが、昭和52年(1977)に亡くなったFから火葬になっている。Fは春日井市熊野に小さな火葬場があつて焼いたという。昭和59年(1984)に亡くなったKは、現在の春日井市営の火葬場であった。

世帯記号	本家・分家関係	寺檀関係(宗旨)
A		常安寺(曹洞宗)
B	Fのシニヤ(分家)	長善寺(真宗)
C		常安寺(曹洞宗)
D	Bのシニヤ	なし
E	Gのシニヤ	常安寺(曹洞宗)
F	Bのホンヤ(本家)	長善寺(真宗)
G	ホンヤ	常安寺(曹洞宗)
H	Gのシニヤ	常安寺(曹洞宗)
I	Gのシニヤ	常安寺(曹洞宗)
J		常安寺(曹洞宗)
K		常安寺(曹洞宗)
L	ホンヤ	長善寺(真宗)
M	Gのシニヤ	常安寺(曹洞宗)
N	Gのシニヤ	常安寺(曹洞宗)
O		常安寺(曹洞宗)
P	Lのシニヤ	長善寺(真宗)
Q	Gのシニヤ	常安寺(曹洞宗)
R		長善寺(真宗)
S	Gのシニヤ	常安寺(曹洞宗)

*常安寺(曹洞宗) 豊山町豊場
 長善寺(真宗大谷派) 名古屋市西区上小田井
 *トムライ(葬式)の葬式組は、真宗門徒のドウギョウ(同行)と禅宗檀家のドウギョウの2グループに分かれて行われている。

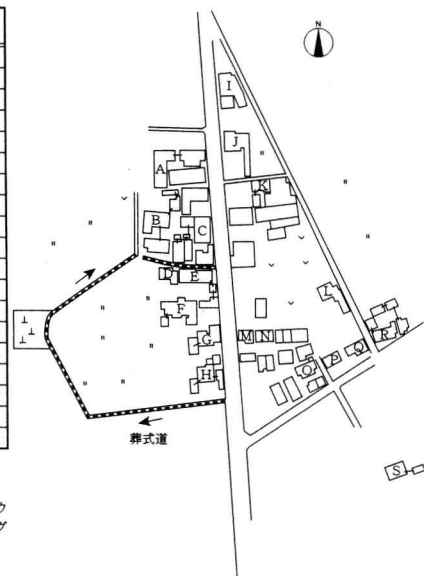


図1 春日井市宗法の寺檀関係



写真1 Y家の旧クズヤブキの家

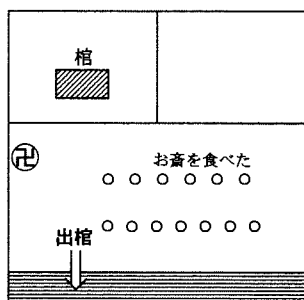
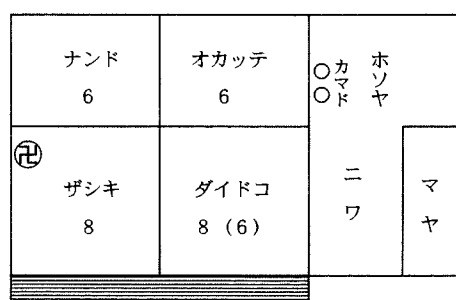
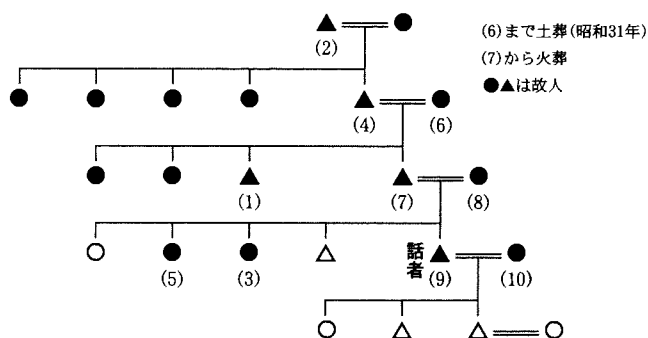


図2 Y家の間取り(上)と葬儀の際の使い方(下)



整理番号	年	法名	形状	備考
(1)	明治35年8月10日	智峯慧讀童子靈位	紙牌	7歳
(2)	明治42年4月27日	釈尼妙浄	繰り出し位牌	
(3)	昭和5年5月9日	釈尼妙鉄	繰り出し位牌	8歳
(4)	昭和11年4月4日	釈 銀正	繰り出し位牌	
(5)	昭和15年5月3日	釈尼妙浄	繰り出し位牌	10歳
(6)	昭和31年3月6日	釈尼由教	繰り出し位牌	Y
(7)	昭和52年12月25日	堅正院釈長信	繰り出し位牌	F
(8)	昭和59年8月16日	精進院釈尼恭信	繰り出し位牌	K 1
(9)	平成17年1月28日	成實院釈鋼輝		K 2
(10)	平成17年7月19日	蓮實院釈金華		

図3 Y家の系譜と死亡年・法名一覧

〔葬儀の準備〕 Yの葬儀の様子を追ってみよう。Yは6日の午前10時頃に亡くなったが、すぐに同行が集まってトムライの相談になった。ムラや親戚への知らせは同行2人が担当し、遠いところの親戚にも自転車で行った。一里くらいまでの所なら同行に行ってもらったという。忌礼は同行が最初に集まったとき、半紙に忌中と書いて玄関に貼った。神棚にも貼った。トムライは同行が中心であったが、トナリ(図1, ACEの家)の手伝いもあった。役割分担には、御飯を炊いたり味噌汁を作る女性のお勝手方、御飯・味噌汁・蓮根・芋の煮たもの・漬け物をどんぶりやお皿に盛って出す配膳方、若者が担当したお給仕係り、リヤカーで曲泉や傘を借りてくるお寺行き係り、役場へ死亡届けを出す係りなどがあった。買い物は「買帳」といって、和紙をとじてつくった帳面に記録した。葬具作りは同行が死亡翌日の7日にした。座棺・位牌・シカバナ・天蓋・藁草履はガンヤ(棺屋)と呼ばれた葬具屋が持ってきた。天蓋は本願寺同行ではなく禅宗同行だけであったが、竹だけは同行が切ってきたという。アナホリ(穴掘り)役は同行で順番に掘っていたが、Yの葬儀のときは専門の人に依頼したという。アナホリ場に酒を持っていき、酒などをもっていかないと深く掘ってくれなかった。穴掘りは葬式当日に掘ってもらい、深さは一間くらいであった。夏は水が出たので掘りにくかったという。

同行によってトムライの準備が進められる中、身内によって死の直後の儀礼が行われた。

Yはオカッテで寝ていたの、まず最初に親族が集まって遺体をナンドに移動させ、北枕に寝かせて逆さに着物を着せた。枕元には「猫が遺体を噛む」というのでカミソリやハサミなどを置き、枕飯を供えて一本線香を焚いた。枕元に集まった親族がシキビ(櫛)の葉に水を濡らして末期の水を飲ませた。湯灌はニワに盥を置いて遺体を据え、縄の櫓をかけた従兄弟や甥がしたという。湯は土間のクドで沸かし、湯灌には水を入れてから湯を入れた。子どもが顔を洗うとき、水を入れて湯

を入れたら「そんなことやってかんわ、葬式の真似だで」と怒られたものだという。湯灌がすむと再び遺体をナンドに移動させ、オッサマ（住職）による枕経も行われた。納棺は、遺体の硬直が始まる前にしなければならなかったもので、はやかったという。座棺であったので膝を折り曲げ、手には数珠をはめた。「お血脈はどうでも入れなければならない」と言われていて、みんな善光寺へ参ったときにお血脈を迎えてきたという。「お血脈をもっていかな



写真2 アンナイ鉦

いと極楽へいけん」とも言っていた。死装束として晒しの着物をきせたが、これはYが生前に自分で作って用意したものであった。納棺するときには、頭の毛を剃ったりした。Yのときには剃らなかったが、昭和11年（1936）に亡くなったYの夫のときには剃ったという。ガンオケ（棺桶）は仏壇側のナンドに安置され、祭壇などはなかった。こうして亡くなってから3日目の8日にお通夜が行われ、同行だけで正信偈を読んだ。そして、身内だけで語り明かしながら、お線香を絶やさないようにしていたという。

〔出棺から埋葬〕 葬儀の呼称をトムライと言っていたが、トムライの中心は埋葬するノバカ（野墓）であり、「トムライ場」などと呼んでいた。自宅では出棺するに先立ち、出棺動行が仏壇の前で行われたはずであるが、あまり記憶になく、それよりもオトキ（お斎）の食事が重要であった。喪家のカドに大きなクドを据えて煮炊きを行い、料理は巻き寿司と油寿司を一人ずつ皿付けしたものを出したという。食事の場所はヨロイドをはずして二間としたザシキ（座敷）とダイドコ（台所）であった。オカッテとダイドコの間は仕切っており、オカッテを家の者や親戚が着替えをする控えとして使用した。食事に必要な机や汁桶、お皿・茶碗などは町内に共同の道具庫があり、これを使った。棺の前には遺影も飾っていない。写真を飾るようになったのは、昭和52年（1977）に亡くなったFからであった。縁側にはノドウグ（野道具）をおいた。帳場は同行が担当し、香典はみんなお金であったという。香典返しは、知多晒の一反か二反と昔から決まっていた。ガンヤさんは用意してくれなかったの、家の者が後からまとめて取り寄せた。

出棺は午後1時頃で、棺は縁側から出した。時間がくると町内の人が鉦を叩き、アンナイガネ（案内鉦）といった（写真2）。年寄りが亡くなったときにはオメデタゾウレン（おめでた葬斂）といって酒を出した。また、二つ折りにした筵をはたいたものであった。茶碗を割ることはなかったという。

葬列の順序は次の通りであった。

①灯籠 竹を折り曲げ、縄でからげて灯籠をしばりつけた。

②一旗・二旗 お金を出すと旗が多くなった。念仏のような文字が書いてあり、白と赤であった。旗持ちは親戚の濃い人であった。

- ③ロクドウ 青竹を四つか五つに割って作ったもの。蓮の花が付いていて、柄は竹、先は刺すように尖っていた。1メートルほどの長さ、花はピンク色、蠟燭を立てるために底は板、その下には紙でつくった葉が2枚、緑の丸い葉が互い違いに付けてあった、竹の節を落として白い紙を巻いた。子ども6人が持った。
- ④シカバナ 台の上に銀紙がビロビロと付いていた。喪主の兄弟が持った。
- ⑤菓子 竹を四角にして簡単につくったもので、四方に大きな干菓子が貼り付けてあった。三宝みたいになっていて、トムライ台の前においた。喪主の兄弟が持った。
- ⑥位牌持ち 位牌は一つで喪主が持った。
- ⑦天蓋 棺にさしかけ、婿がするものであった。
- ⑧棺 棺を吊るのはオイトマゴイ（お暇乞い）といって、甥と孫であった。喪主の奥さんは棺の側に付いていった。
- ⑨三旗・四旗 念仏か何か書いてあり、下に小さく墨で番号が書いてあった。町内の人が呼び出すときに「一旗誰々」といった。
- ⑩一般の会葬者 女の人が前に出ることはなかった。

ガン（棺）は座棺であったので、縄を巻いて2人が天秤棒で担いでいった。葬式の時は前が左肩で後ろが右肩、というように違えたものだという。善の綱は禅宗同行の場合でもなかった。花籠は禅宗の裕福な家がした。籠で編んだ中にザルを入れ、1銭か2銭を紙に包んだものをザルの中に入れた。一番先頭の両側に立ってトントーンと地面を突くと、バラバラと銭が落ちた。子どもたちが拾った。ガンヤが持ってきた藁草履の鼻緒には紙が巻いてあり、喪主と親戚の濃い人が履いた。全員ではなかった。友引に葬式を出すときや、1軒の家で葬式が重なったときなどは、「二つあることは三つある」ということで、同行が竹箕を縄で腰にからげて引きずっていった。横槨の場合もあった。服装は喪主が紋付き・羽織袴、奥さんは白の喪服であったが、その他は黒の喪服であったという。

葬式道を通って野墓に着くと、トムライ台の所を左回りに三回まわって棺を据え、棺の前に菓子・シカバナ・位牌をおいた（写真3）。入り口にある「南無阿弥陀仏」石塔のところに、ロクドウ（六道）を6本1列に並べて刺した。曲衆の後ろに荒筵を敷き、そこで一人一人焼香をした。トムライ場での焼香の順位は「次、おまえだぞ」といっておこない、順番などをあらかじめ決めることはなかった。ノバカ（野墓）でのトムライは一時間もかからず、最後に喪主は墓の出口のところに出て「ありがとう、ご苦労様でした」と会葬者に挨拶した。

埋葬は力の強い穴掘り役の4人が、棺の下に荒縄を2本引いて吊りながら



写真3 宗法のノバカ（野墓）

ゆっくりと降ろした。縄はそのまま入れ込んだ。「ほかりこんでくれよ」といわれると、身内の濃い人たちが大きな石や土を放り込んだ。それからスコップやジョウレンを持ってきて埋めた。墓上にはイヌハジキといって、1本の竹をいくつかに割ったものを土饅頭の中心から放射状に刺し縄で結んだ。四隅には旗を刺し、シカバナ・菓子・位牌を前に置いた。四十九日の間はこのままにしておき、その後は取り払ってしまったという。墓印としてツツジ・松・モウチギなどの木を植えた。

〔野帰りに四十九日〕 トムライから帰ってくると、家の入り口に鹽が出してあったので片足ずつ洗い、塩を体にふった。藁草履はトムライ場の西側のところに脱いで捨ててきたが、履き物を用意したので、裸足で帰るということではなかったという。家に戻ってくると同行がオネンブツといって正信偈を読んだ。終わると喪主が「お忙しいところを皆様ご苦労さまでした、膳が出来たので食べていって下さい」と挨拶して夕飯になった。酒などを出し、身内の者が接待をした。皿付けで芋やヒロウズ・ガンモドキ、椎茸などを出した。それから家の者と親戚の夕飯となった。

四十九日までの中陰期間は、「淋し見舞い」といって立日、三十五日と四十九日のオタイヤ(お逮夜)に同行がネンブツに来てくれたので、親戚が餅、饅頭、砂糖などを出した。葬式の翌日には「三日の寺参り」といって、檀那寺に米などをもって行った。ノバカには七日ごとにお花を持ってお参りに行き、四十九日がすむと土饅頭の上に飾った天蓋やシカバナ・旗を全部取り去った。四十九日には四十九餅といって、小さな四十九個の餅を作り法要後に塩をつけて食べた。「四十九餅は食べてくもんだ」「砂糖などはつけてはいかん」と言われた。三合餅の大きな餅も作ったが、これは参った人に持ち帰ってもらった。年忌は一・三・七・十三・十七・二十三・二十七・三十三回忌まで勤めたが、それ以後はしなかったという。

二 自宅葬から葬儀会館へ―葬儀の「場」の変化

昭和31年(1956)に亡くなったYの葬儀をみてみたが、葬儀の中心は葬列とノバカでの葬場勤行であった。Yは自宅でなくなり、親族や同行・トナリといった近隣互助組織によって葬儀の準備と通夜が行われ、自宅で出棺勤行も行われていた。たしかに葬送儀礼は、死の直後から始まり通夜儀礼、出棺勤行、葬列、葬場勤行、野帰りの儀礼と続く一連のものであるが、トムライと呼ばれていた葬儀の中心は埋葬墓地であったノバカでの儀礼であった。

自宅を出棺する出棺勤行は記憶になく、むしろオトキと呼ばれた出立ちの膳を参列者に供することが重要であった。そして、葬列を組んで棺を家から出すことに意味があった。したがって、葬儀は葬列から葬場を中心的な「場」とする儀式であったのである。

昭和30年代までの葬儀は、出棺→葬列→葬場(火葬場・埋葬墓地)という流れであったが、出棺→葬列→寺院の庭→葬場という形態もあった。これは火葬場や埋葬墓地で本来行われる葬場勤行が、葬場が狭いことなどの理由から寺院の境内(庭)で執行されたものである。写真4は、昭和29年(1954)7月に名古屋市西区比良(旧西春日井郡)で行われた葬儀の様子である。長年放置されていた8ミリ撮影機のフィルムをDVD化したものからの映像なので、不鮮明であることは仕方ないであろう。しかし、出棺から埋葬まで記録された(録画時間、13分29秒)貴重な資料である。自宅から出棺して葬列が延々と続く。先駆と先提灯・造花の花輪を先頭にして、喪主の妻と女性たち、鶴亀の燭台持ち、金灯籠、シカバナ、遺影写真、位牌(喪主)、前の灯籠、輿、後ろの灯籠、男性



4-1 喪主と位牌・遺影



4-2 自宅から出棺



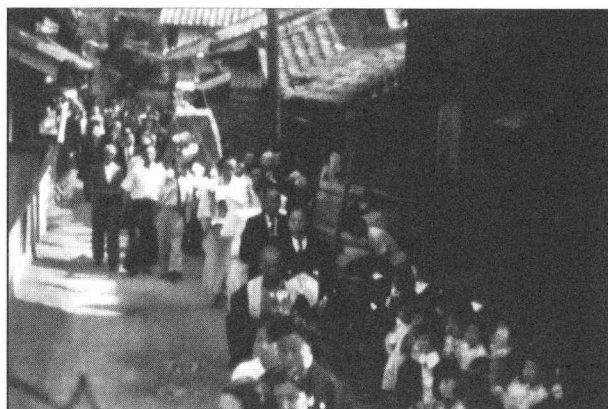
4-3 座棺を輿で運ぶ



4-3 葬列の先頭



4-5 先頭の女性たち



4-6 村の中の歩く葬列の様子

写真4 昭和29年7月の葬儀(名古屋市西区比良)
*ハミリ撮影機のフィルムをDVD化したものより映像化したので、不鮮明である



4-7 葬列先頭の提灯と造花の花輪



4-8 棺前の金灯籠・シカバナ・位牌持,
棺の前後に前の灯籠と後ろの灯籠



4-9 村の寺院境内で葬儀, 導師



4-10 喪主は導師に土下座してから焼香



4-11 喪主挨拶



4-12 埋葬の様子, 周りの者が花を投げ入れ,
鍬で土を被せる

写真4 昭和29年7月の葬儀(名古屋市西区比良)
*ハミリ撮影機のフィルムをDVD化したものより映像化したので、不鮮明である

たちと葬列は構成されていた。ムラ中総出の中を練り歩き、ムラ寺の庭（境内）で葬場勤行が行われた。喪主一家や近い親族は白の喪服、藁草履である。喪主は焼香するとき、導師に土下座して拝礼していた。葬場勤行後に喪主挨拶、そして近接する境内墓地に埋葬している。宗派は真宗であったが、周りに禅宗檀家が多かったことから土葬であった。皆が見守り、花を投げ入れながら、埋葬を専門とした人が鍬で土を被せていた。この頃、一部に生花が使用されていたが造花の花輪が主であった。昭和30年（1955）に名古屋市編入、ムラの景観は昭和30年代半ばの土地区画整理によって大きく変化している。

こうした葬列と葬場を中心としていた形態は、昭和40年代になると自宅葬になった。自宅が葬儀の中心になり、自宅が葬儀の「場」＝葬場になったのである。このように変化移行した理由は、公共の火葬場が成立して、それまでムラの中にあった火葬場や埋葬墓地で遺体を処理していたことを止めたことによる。またその背景には、土葬から火葬への移行という理由もあった。火葬場が自宅やムラから遠方になったので、自宅で出棺勤行から葬場勤行まで行うようになり、「自宅が葬場」になったのである。当然のことながら遺体を運ぶ葬列はできなくなり、霊柩車になった。写真5は、平成3年（1991）に撮影した旧八開村（現、愛西市）の葬列である。旧八開村には、平成になっても霊柩車を使用していなかった。各ムラにはサンマエ・ヤキバと称する墓地があって、火葬する火屋が建っていた（写真6）。昭和50年（1975）5月、旧祖父江町（現・稲沢市）に火葬場が一市二町（稲沢市・旧祖父江町・旧平和町）でできたが、旧八開村の各ムラは利用することなく、ムラのサンマエで火葬していたのである。したがって、自宅を出棺すると葬列を組んでサンマエに向かっていた。上東川（愛西市）では①オナゴ衆、②寺院僧侶、③位牌、④野団子・花（菓子）、⑤提灯・六道、⑥輿、⑦送り（親戚・一般会葬者）という順序であった。喪主が白木の位牌を持ち、花・団子・菓子持ちと続いた。輿の前後には孫や近親者が持つロクドウ（六道）と提灯一対が並んでいた。輿はチリトリ（ハシゴともいった）と呼ばれた台に乗せられ、縄をかけて吊っていった。縄は左巻き、



写真5 旧八開村（現・愛西市）の葬儀・出棺と葬列・リヤカーで棺を運ぶ、平成3年撮影

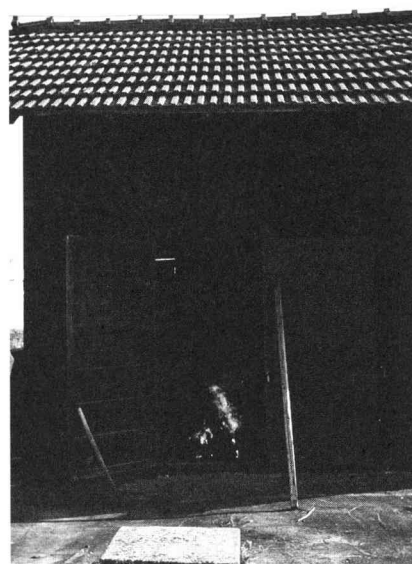


写真6 火屋と火葬・旧八開村（現・愛西市）平成3年撮影

縄に巻き付ける白紙も左巻であったという。上東川で「輿」と呼んでいたものは、棺を梯子のようなものの上に乗せて運ぶものであったが、棺をリヤカーで運ぶムラもあった。リヤカーの上に板を乗せ、その上に棺を置き、さらに棺の上には寺から借りてきた七條袈裟を掛けていた。現在では祖父江の公共火葬場を使用するようになり、こうした葬列や輿も消滅してしまった。写真7は、昭和53年（1978）に撮影した日間賀島での葬儀で、座棺を運ぶ輿である。



写真7 寺院境内での葬場勤行を終えて輿を運ぶ
(日間賀島), 昭和53年撮影

霊柩車が登場して葬列がなくなったのではない。愛知県における霊柩車の登場は古い。名古屋の「一柳葬具総本店」（以下、一柳葬具店と略称する）が米国からビム号を購入して、大正10年（1921）9月4日の新聞『新愛知』の紙面に宣伝広告を出している。この霊柩車が最初に使われたのは、大正11年（1922）2月25日に行われた実業家・神野金之助の葬儀のようで、東本願寺名古屋別院で行われた神野家の葬儀に写真に写っている。黒塗、箱型の車体側面に大きな花輪を付けた格好であった。一柳葬具店は、昭和6年（1931）頃には米国車リンカーン号を購入し、改造した霊柩車を使っている。葬列のとき棺を納めた輿と同じ型のものを後部に飾った、いわゆる「宮型霊柩車」であった⁽⁶⁾。このように葬儀に霊柩車が使われるようになったのは、大正11年からとはやかだったが、急速に広まったかというとは必ずしもそうではない。名古屋市瑞穂区を中心に行っていた葬祭業者では、戦後までリヤカーの人力霊柩車であったという。リヤカーで平成初年頃まで遺体を運んでいた旧八開村の姿は、愛知県における最後の姿であったかもしれない。

葬儀の「場」が、ノヅトメ（野勤め）というムラの火葬場や埋葬墓地から自宅に変わったということは、葬儀式からみれば出棺勤行と葬場勤行の区別がなくなっていくことでもあった。自宅がかつての火葬場や埋葬墓地という葬場になった、ということである。ちょうどこの頃、葬祭業者が葬儀全般にわたって深く関与する時期でもあった。自宅で葬儀を行うようになってからの一番の変化は、祭壇の登場である。火葬場や埋葬墓地で葬場勤行を行っていた頃は、祭壇といっても「野卓」の形態であった。遺体と卓台の間にロクドウ（六道）が並べられ、卓台の上にはシカバナの花瓶、香炉、燭台を中心にして根・菓・餅といった決められた供物が置かれる程度であった。この野卓形式の祭壇がなくなり、次第に華やかな祭壇に変わっていったのである。祭壇の変化については後で細かく述べることにする。

自宅での葬儀は、概ね昭和40年代から60年代まで行われていたが、平成になって葬儀は一変していく。葬儀会館の成立であった。表1・2・3は、尾張を中心に営業している葬祭業者三社を取りあげて、葬儀会館設立の様子をまとめたものである。これをみると、平成に入ってから次々と葬儀会館をオープンさせていることが一目瞭然であろう。表1の三輪本店は、昭和54年（1979）に雁

道斎場（名古屋市瑞穂区船原町）を設立しているが、名古屋で最初の葬儀会館であったという。社長が北九州や広島へ行って葬儀会館をみてきたことから、「これからは斎場の時代だ」と考え、倉庫にしていた場所に作ったものであった。しかし、当時は自宅葬や寺院を会場とする寺院葬が主流であったので、会館での葬儀は一か月に一件か二件しかなかったという。ところが、平成に入って名古屋市内や近郊に次々と葬儀会館をオープンさせている。表2の愛知冠婚葬祭互助会（愛昇殿）は、会社を昭和31年（1956）に設立して昭和30年（1955）代、40年（1965）代、50年（1975）代は結婚式場を中心に展開していたが、平成になって毎年驚異的なスピードで葬儀会館をオープンさせ、名古屋市内だけでなく名古屋近郊・尾張北部・尾張西部・三河・知多にまで進出している。表3の「のいり」は一宮市に本部を置き尾張北部を中心にしている葬祭業者である。創業が大正元年（1912）で、一宮市本町において「野杖商店」を設立し、葬祭具や造花の事業を開始したという。昭和30年には「株式会社 のいり」となり、昭和41年に互助会部門を併設、昭和50年代には年々増加する業務に対応して4階建ての本社ビルを建設したりしている。そして、平成3年以降、葬儀専門の式場を一宮市を中心に展開させるにいった。

自宅での葬儀から業者による葬儀専門の会館へ移行することによって、葬儀がどのように変化したかについては後で述べるが、「葬儀会館」という葬儀の「場」は昭和50年代まであまり認知されていなかったようである。写真8は、名古屋

表1 「三輪本店」の葬儀会館設立

設立年次	会館名称	所在地
大正13年	創業	名古屋市瑞穂区船原町
昭和54年	紫雲殿雁道斎場 (現、堀田斎場)	名古屋市瑞穂区船原町
平成6年	紫雲殿道德斎場	名古屋市南区豊田
平成8年	紫雲殿小田井斎場	名古屋市西区中小田井
平成10年	紫雲殿新瑞斎場	名古屋市瑞穂区妙音通
平成13年	紫雲殿堀田斎場	名古屋市瑞穂区船原町
平成14年	紫雲殿滝ノ水斎場	名古屋市緑区相原郷
同	紫雲殿東郷斎場	愛知郡東郷町春木
同	紫雲殿岩塚斎場	名古屋市中村区岩塚本通
平成15年	紫雲殿川名斎場	名古屋市昭和区檀溪通
同	紫雲殿徳川斎場	名古屋市東区徳川
平成17年	紫雲殿くすのき斎場	名古屋市北区丸新町
平成20年	紫雲殿北名古屋斎場	北名古屋市熊之庄
平成22年	紫雲殿豊明斎場	豊明市大久伝町

表2 「愛知冠婚葬祭互助会」の葬儀会館設立

設立年次	会館名称	所在地
昭和31年	愛知冠婚葬祭互助会設立	
昭和61年	平和愛昇殿	名古屋市中区平和
昭和62年	春日井愛昇殿	春日井市瑞穂通
平成2年	那古野愛昇殿	名古屋市西区那古野
平成3年	名和愛昇殿	東海市名和町
平成4年	藤が丘愛昇殿	名古屋市名東区朝日が丘
同	若葉通愛昇殿	名古屋市北区若葉通
平成5年	太閤通愛昇殿	名古屋市中村区竹橋町
平成6年	野並愛昇殿	名古屋市天白区野並
同	岡崎愛昇殿	岡崎市洞町
平成7年	六番町愛昇殿	名古屋市熱田区四番
平成8年	犬山愛昇殿	犬山市大字犬山
平成9年	津島愛昇殿	津島市藤里町
同	甚目寺愛昇殿	あま市中萱津
同	師勝愛昇殿	北名古屋市高田寺
同	豊田愛昇殿	豊田市大林町
平成10年	豊明愛昇殿	豊明市栄町
同	吹上愛昇殿	名古屋市千種区千種通
平成11年	一宮朝日愛昇殿	一宮市富士
同	一宮松降愛昇殿	一宮市松降
同	江南愛昇殿	江南市古知野町
平成13年	尾西愛昇殿	一宮市小信中島
同	半田愛昇殿	半田市南本町
平成14年	安城愛昇殿	安城市三河安城南町
平成17年	堀田愛昇殿	名古屋市瑞穂区堀田通
平成19年	小牧愛昇殿	小牧市西島町
平成20年	港愛昇殿	名古屋市港区砂美町

*以後、自由が丘・高畑・一宮奥町・蟹江にもオープン

表3 「のいり」の葬儀会館設立

設立年次	会館名称	所在地
大正元年	創業	一宮市本町
平成3年	クレストホール本町	一宮市大志
同	クレストホール師勝	北名古屋市六ツ師
平成9年	クレストホール尾西	一宮市三条
同	クレストホール木曽川	一宮市木曽川町黒田
平成12年	クレストホール一宮	一宮市新生
平成13年	クレストホール伝法寺	一宮市丹陽町伝法寺
平成16年	クレストホール時之島	一宮市時之島
平成21年	ファミリーノ多加木	一宮市多加木
同	ファミリーノ師勝(クレストホール師勝を改修)	北名古屋市六ツ師



写真8 葬儀会館入口の石柱
(名古屋市北区大曾根)



写真9 自宅葬入口脇の櫛塔

市北区大曾根近くにある会館である。入り口に「聖域」と刻まれた石柱が建っている。この会館は昭和36年(1961)に結婚式場としてオープンしたが、昭和56年(1981)に結婚式場を閉鎖して「総合葬礼式場」に切り替えたものであった。名古屋市内でも比較的是やくにできた葬儀会館といってよいが、その頃、まだ葬儀を普通の建物で執行することへの抵抗感があって、わざわざ「聖域」と表示しなければならなかったのであろう。葬儀会館の新規オープンは今でも進行中である。

現在、愛知県では葬儀会館での葬儀がほとんどである。全国的にみても同じであろう。葬儀の場としての自宅はほとんどなくなり、すべての儀礼が葬儀会館で行なわれるようになった。葬儀会館が葬儀の「場」になったということは、葬儀会館が「葬場」になったということである。このことを象徴的に示す儀礼が、会館内の会場入り口に立てられる櫛塔である。竹を芯にした巻藁に櫛を挿したものをシキミトウと呼んで、自宅葬のときは家の門に提灯と一緒に飾っていた(写真9)。嫁いだ人などの親族が供えるものであった。葬儀会館ができた当初は、必ず会場入口に飾られていたが、近年では祭壇の左右に飾られる白菊の背後や横隅に置かれたりするようになっている。櫛塔とはなにか。近世における葬送史料の「葬場図」をみると、葬場の入り口に「青門」とある。これがシキミトウであり、⁽⁷⁾ 臨時の葬場門を表示するものであった。櫛塔は死者霊の依代という意味も持っていた。死後直後に用意される枕机の一本花も櫛である。家の門口にシキミトウが

飾られていたときは、意味は分からなくなっても、近世以来の葬具の役割を果たしていた。葬儀会館の祭壇脇に置かれるようになると、意味がまったく不明になって、単なる供花としての装飾になってしまったのである。しかし、櫛塔が葬儀会館での葬儀にあるということは、葬儀会館がかつての火葬場や埋葬墓地で行われた「葬場勤行を執行する場」であることを示している。

葬儀としての「場」は、火葬場（埋葬墓地）→（寺院の庭〈境内〉）→自宅→葬儀会館と変化してきた。

三 祭壇の成立と変化

葬儀に葬祭業者が関与することは、葬儀会館の設立以前から行われていた。都市部においては、すでに近世から葬儀に葬具を提供する業者があつて商売として成立していた。明治から大正にかけては、各地域にガンヤ（棺屋）・コシヤ（輿屋）と呼ばれた個人的な業者があつて、主に葬儀に必要な「葬具」を提供していた。春日井市宗法でも、昭和31年（1956）の葬儀にガンヤが座棺・位牌・シカバナ・天蓋・藁草履といった葬具の一部を持ってきた。いまでは毎月掛け金をする互助会組織の葬祭業者が会社として葬儀を執り行なっているが、元は「葬具店」が始まりであったといつてよい。同行や組・同族が中心となつて地域社会の中で行われていた葬儀に、葬具店が関わるようになって、次第に葬儀が変化していった。その変化の中でも、まず祭壇の成立があげられる。

昭和31年に亡くなった春日井市宗法のYのとき、祭壇はなく故人の写真も飾らなかったという。昭和52年（1977）に亡くなったFのときには、写真が飾られ祭壇も設けられた。Yの葬儀では、遺体は湯灌されると座棺に納められてナンドに安置され、この座棺が自宅における葬儀式の中心であった。棺の前には枕飾りとして小さな机に櫛と燭台、香炉、枕飯などが置かれていたにすぎない。今日みるような祭壇は、いつから普及するようになったのか。写真10は、白木の彫刻祭壇（彫刻幕板祭壇）といわれるものであるが、こうした祭壇が一般的に普及するようになったのは昭和30年代からである。それ以前には、昭和初期から昭和30年代まで木製の三段、四段、五段に白布を敷いた「白布祭壇」が主流であった。そして白布に代わって金欄が掛けられ、高度経済成長期になると白布や金欄を掛けずに、彫刻が施された板で段を組む彫刻幕板祭壇が誕生したのである。⁽⁸⁾

祭壇ができることによって、葬儀の中心が遺体を納めた棺（柩）から祭壇中心に変化した。このことは棺の置かれる位置が二転三転してきたことに現れている。現在、棺は祭壇の一番手前に安置されるのが一般的であるが、昭和50年代初期の名古屋市内では、棺を祭壇の後ろに安置するのと祭壇の前に安置するやり方が半々であったという。祭壇の後ろというのは、壇の裏側に大きなカンダイ（棺台）があつて「コシ（輿）の高さまで上げて安置した」という方法である。補足説明をすると、コシ（輿）というのはカンマエ（棺前）と通称されているもので、祭壇の最上段に飾られている建物風の聖殿のことである。これを東京辺りでは「棺かくし」「飾り輿」「半輿」ともいう。昭和初期以降に白布祭壇が成立したとき壇の最上段に棺を安置していたが、棺が見えてしまうといふので、覆い隠すために考案された飾りであつた。かつて使用されていた棺を入れる輿をイメージして作られた飾りであることから、「コシ（輿）」「飾り輿」「半輿」と呼んだのであろう。⁽⁹⁾ところが、葬祭業者にとっては祭壇をとらないと出棺できない不都合さと、親族から顔が見えないという不満が出たりした。そこで、祭壇の後ろに低くして棺を安置したりもしたが、結局祭壇の一番手前に安置する現在の形式になったのである。葬儀に参列する会葬者は、聖殿化したコシ（飾り輿）、遺影

写真や位牌、装飾化した灯籠といった葬具の並ぶ祭壇に対して拝礼し、手前に置かれた遺体の棺はほとんど視野に入っていない。棺中心から祭壇中心に変化したのであった。

祭壇が中心になり、葬儀全体が装飾化し華美になるにしたがって、いまひとつ大きな変化がおきた。生花の大量使用である。葬儀に生花を全面的に取り入れたのは、名古屋で最初に霊柩車を導入した一柳葬具店であったといわれている。一柳葬具店は、明治10年(1877)、名古屋市住吉町に「葬具商一柳商店」を創業している。金蓮、銀蓮、花輪、柶、花車、輿(寝棺輿、坐棺輿、香炉輿、放鳥輿)といった葬具を取り扱い、その意匠を独自に開発してきたという。葬儀の花は造花が主であったが、昭和12年(1937)に「ヤナギヤ生花部」を新設している。その頃、ボク(木)を使った投げ入れのような生花様式から盛り花スタイルへと変化し、祭壇脇に並べて飾るようになった。手桶や籐・青竹といった箆に生花を飾

り付ける形式から、白菊・黄菊を多く盛り花にする形式へと変わってきたのである。現在、祭壇脇の左右を菊一色で飾り付けているが、こうした白菊は稲沢、弥富、田原、新城で生産される電照菊である。大須の生花市場に入荷して大量に出回っている。菊には品種が異なる冬菊と夏菊があって、端境期の彼岸頃には鹿児島県喜界島の菊も入ってくるという。

自宅葬であったとき、儀式の行われる部屋の壁面は白幕で被われ、祭壇は白木、位牌や六灯・香炉などの葬具も白木、左右には白の菊一色で飾り付けられていた。葬儀会館へ移行すると、葬儀専用部屋なので白幕は一部しか張らなくなったが、白木の祭壇や白菊という「白のイメージ」は同じであった。ところが、ごく最近になって、また大きく変化してきている。祭壇がなくなって、色花を中心としたデザイン的な花祭壇の登場である⁽¹¹⁾(写真11)。真ん中には故人の写真が大きく安置される。白の菊はなくなりつつある。故人の生前の意思によってバラばかりで花祭壇をつくり、会葬者が帰るときにバラを渡したという事例まである。これまでの「白」という葬儀の色が大きく変化しつつある。



写真10 白木の彫刻祭壇



写真11 花祭壇

四 儀礼の消滅と葬儀の世俗化

葬送の儀礼は、死の直後に行う遺体を北枕に寝かせることから始まり、枕飾り、末期の水・神棚除け・忌中札・湯灌・死装束・納棺・死の通知・役割分担・葬具作り・葬式の食事準備・通夜・出棺・葬列・火葬場や墓地の葬儀式・野帰・葬後の中陰儀礼などから構成されていた。従来の民俗調査における葬送儀礼の項目である。地域の中に火葬場や埋葬墓地があったところはもちろん、霊柩車が登場しても自宅葬であった段階まで、こうした儀礼はある程度行われていた。しかし、葬儀会館を葬場とするようになった平成以後は、まったく変わってしまった。儀礼は消滅したり、一部に残っていても儀礼の流れと意味が変わってしまったのである。まず、葬儀の流れを確認しておきたい。

現在、愛知県で行われている葬儀の流れは次の通りである。病院で死去すると葬祭業者に連絡して遺体を葬儀会館へ搬送してもらう。平成10年（1998）ころまでは、ほとんど自宅へ搬送していたが、いまでは葬儀会館直送が多くなっている。その後、喪主と葬祭業者との間で葬儀の規模とやり方を相談し、檀那寺の枕経も行われる。亡くなった時間によっても異なるが、普通は翌日が通夜、翌々日が葬儀となる。通夜は午後6時～7時頃、葬儀は午前10時から午後2時頃までの間である。とくに葬儀の時間は火葬場の空いている時間から逆算して決定される。通夜は、昭和40年代頃まで親族や地域の組内、同行などが中心となって行われ、檀那寺の住職による読経もなかったところが多かった。いまは本葬儀よりも会葬者の人数が多くなり、葬儀と通夜との区別が曖昧になって喪主の挨拶まで行うところもある。葬儀は無宗教でなく、従来通り仏式など喪家の宗教によって執行されが多い。葬場勤行が終了すると棺を囲んで親族による最後のお別れとなり、棺の蓋が閉じられ出棺となる。火葬場では灰葬（火屋）勤行などが行われたりもするが、ない場合もある。火葬にされて拾骨まで約1時間半ほどかかり、拾骨後に再び葬儀会館に戻って初七日法要、精進落としとなって終了する。

さて、問題の儀礼や葬具の変化についていくつかみてみよう。まず死の直後である遺体安置の仕方であるが、自宅の場合は北枕を意識して安置している。これは家族よりも葬祭業者の担当者が教えられて意識しているから行なっている、といってよいだろう。逆さ着物の儀礼は忘れられて消滅した。枕飾りは白木の机の上に櫛と香炉・燭台を置くが、1本線香を立てることはなくなりつつある。かわって、蚊取り線香のような渦巻き型の線香になってきている。枕飾りの机にはカミソリなどの刃物を置いているが、これも置かない場合もあったりする。家内に神棚があれば、白紙を貼って隠しているが、「忌中」と書かれた紙を自宅玄関に貼ることは、葬儀が会館へ完全に移行した段階ではなくなった。死が確認されるとすぐに死者の枕元に供えていた枕飯や枕団子もなくなったが、それでも平成10年頃までは行われていた。葬儀会館の祭壇に必ず枕飯と団子が置かれていたが、現在では姿を消した。これは家族や親戚などで、「枕飯をすぐに供えるものだ」と言う人がなくなっても、葬祭業者が旧来の儀礼をある程度踏襲しようとしていたからであった。しかし、いまでは葬祭業者にその意識はなくなり、新しい現代的な葬儀を創り出しているのである。

細かな葬送儀礼の中でも、とくに絶縁儀礼がなくなったといってよいだろう。例えば出棺儀礼である。自宅から棺を出す前、デダチ（出立ち）の膳といって親族や手伝いの人が必ず食事をとっていた。これはヒジ（非時）であって、時間に関係なく食べるものであり、死者との食い別れという

意味をもっていた。尾張西部、とくに木曾川流域では、唐辛子汁あるいは胡椒汁といって、醤油をうすめたものや汁の中に「涙を誘うから」と唐辛子や胡椒を入れた汁を出棺前のヒルオトキ（昼お斎）に出していた。棺が家を出るとき、酒を飲んだりもしていた。これをハバキ酒といって湯飲みで飲んだ（愛西市東赤目）、輿を外に出すときデダチ酒といって杯に酒をついでみんなが飲んだ（同市上丸島）、戦前まで



写真 12 筵叩き（旧八開村），平成3年撮影

はデダチ（出棺）に酒を振る舞ってハバキ酒といった（同市上納）という。ハバキは「脛巾」で、外出や遠出するとき脛に巻き付けたもののことである。「脚絆」にあたる。死者が旅立つに際して、別れの杯を交わす意味であった。酒を飲んで棺が家の門口をでると、すぐに手伝いの女性などが筵を持ち出してオナゴ竹（女竹）でバタバタと打った（写真12）。「帰ってこないように叩き出す」のだと説明していた（愛西市鶴多須）。こうした筵叩きは尾張東部の禅宗地域でも行われていた。キタハンジョウ（北半畳）といって、棺の下に敷いた筵を出棺のときに持ち出し、竹と木で叩いて死者を送り出していた。傍らでは筵をあぶるように藁を一把燃やしていたという。現在、葬儀会館での葬儀になって、死者との最後の別れは棺の蓋を閉じるときである。かつては石でもって釘を蓋に打ち付けるのが習わしであった。名古屋市内でも葬祭業者の人が最初は専用の金槌で釘をある程度打ち、残りの長さを石で遺族に打ってもらっていたという。しかし、八事火葬場からの依頼もあって、昭和53年（1978）頃に棺蓋の釘打ちはしなくなった。葬祭業者の者が遺族に向かって「皆さんの手で閉じてください」「皆で手を添えて、足の方から置いてください」などと言っている。また、名古屋市内でもカリモン（仮門）といって、竹を四角にして上部を紐で縛った門を葬祭業者が道具として作っていた。出棺して棺が道路に出る前、霊柩車の前でカリモンをしていたという。やはり昭和50年代初期までのことである。禅宗の家では、出棺のときに死者が使っていた茶碗を割ったりしていたが、現在は会館での初七日法要が終わり「自宅に帰ったとき家の前で割ってください」などと言っている。こうした死者との絶縁儀礼は、自宅葬のときまで地域の人によって行われていたが、葬儀会館になってほとんど姿を消してしまった。

このように葬儀が変化した理由は、前に述べたように「葬儀の場」が火葬場（埋葬墓地）→自宅→葬儀会館と変わり、家族や地域がもはや葬儀を行う主体ではなくなってしまったことによる。しかし、これは「外の変化」であって、実は大きな「内なる変化」も同時に起こっていた。遺体観念や「死」に対する観念の変化である。

「死者」をどう取り扱うか、とくに死の直後である「遺体」にどんな儀礼をするのか。

死の直後から通夜までの間、親族が行う儀礼の中で重要なものに湯灌と納棺がある。先に春日井市宗法の事例を掲げたが、昭和30年代の西尾市南中根における様子もみてみよう。湯灌は近親者・兄弟で死亡したその日の夜に行われた。遺骸をナンド（納戸）に北枕で寝かせ、納戸は部屋を閉め切っ

たという。荒筵の上に盥と棺桶を置き、盥には水を入れてから湯を入れた。逆さ水である。盥の中に座らせた遺骸を一人が支え、もう一人が布で体中を拭いた。湯灌が済むと棺に入れ、湯灌した水は火葬場に掘ってあった穴に捨てたものだという。葬祭業者が関わるようになって、湯灌は盛んに行われている。昭和52年(1977)頃の名古屋市内では、葬祭業者の社員が行っていた。枕経が終わってから、洗面器や盥に逆さ水を用意し、手足など出ている部分をガーゼや手拭いで拭いていた。家族の者に拭いてもらうようにしていたという。死化粧も葬祭業者がしていた。しかし、最近では葬祭業者とは別な納棺師が行っている。自宅でする場合は、介護用の浴槽を持ち込み、やはり逆さ水を足元から胸元までかけたあと洗顔・顔そり・洗髪などを行っている。葬儀会館で行うときも同様である。その後に納棺となるが、経帷子を着せ旅姿をさせたものであった。現在でも葬祭業者は経帷子を着せているが、時々、カッターシャツやネクタイ、スーツ姿にする人もある。女性では着物の人、洋服の人、ダンスをしていたのでドレスの人もあるという。また宗派によって異なるが、手甲と脚絆、紙に印刷した六文銭も入れ、頭陀袋も首から掛けてたりしている。草鞋はなくなったが、足袋ははかせているとのことであった。

かつての葬儀は、いかに死者を現世から来世へ送るか、ということであった。昭和10年(1935)代までの湯灌では、このとき死者の髪の毛を剃ることが真宗門徒では行われていた。コウゾリ(頭剃り)などと呼んでいた。現在ではまったく理解できなくなってしまったが、これは現世の姿である俗体から出家者の姿である法体にする剃髪(12)の儀式であった。俗体の姿であれば往生・成仏できないと考えられていて、法体の姿にしなければならなかったのである。頭陀袋や血脈を納棺時に入れたり、葬儀で引導をわたすこと、ハバキ酒で別れの杯を交わしたり、筵を叩いて死霊を送り出すこと、これらは死者を「この世」から「あの世へ」送る儀礼であった。そこには仏教的な浄土や悟りの世界、あるいは民俗的な「あの世」という、死者がゆくべき世界としての他界観念が存在していたのである。しかし、葬儀会館での葬儀はほとんど世俗化してしまった。

いま一度湯灌と納棺の問題にもどるが、近年さらに変化しつつある。葬祭業者による遺体のエンバーミングである。エンバーミングは遺体を保存する方法として西洋で発達した技術であるが、ある葬祭業者はアメリカの「大学葬祭学科」で習得した方法を導入して、エンバーミング「サービス」を広めようとしている。その内容は、①全身を消毒液で洗浄する、②目を閉じ口元を整えて「安らかなお顔」に復元する、③小さく切開をしてエンバーミング薬液を注入する、④切開部分を縫合して再度全身を洗浄する、⑤ご要望に応じて衣裳を着せます、⑥ご要望に応じて髪型を整え化粧を施します、⑦ご要望に応じて納棺します、というものである。遺族には、表情や髪型を整えるために参考とする故人の写真提出が求められる。生前着ていたお気に入りのスーツ、作業着、着物、洋服、肌着などの用意、あるいは愛用していた口紅、ファンデーション、マニキュアなども求められる。遺体の腐敗防止・消毒といった目的もあるが、このエンバーミングは「生前元気だった頃の表情を取り戻し」、「亡くなられた方とご遺族がより良いお別れをするため」に行なっているのである。(13)その結果、どういう儀礼の変化が生じているかとみれば、棺の蓋を二つに切断して遺体の半身を見せられるようにしてしまった。当然、葬場勤行後の最後のお別れで「棺の蓋を閉じる」ということもなくなるのである。かつての葬儀では、湯灌のときに髪の毛まで剃って法体姿にしていた。遺体に戒名(法名)を授け、棺の上には金襴の七條袈裟まで被せていた。棺覆袈裟である。死者(遺体)

をホトケ（仏）として取り扱っていたからである。しかし、現代の葬送儀礼にみられる遺体と死者は、もはやホトケ（仏）ではなく、「生きているかのように」化粧を美しくした死者（遺体）であり、生きている者に「見てもらう」ための姿になった。ここには、死者観念と遺体観念の大きな変化がみられる。これを世俗化といってよいだろう。生者にとって「死」と死者（遺体）は、「恐怖」と「哀惜」の感情をいだく対象である。しかし、現代においては「死」への穢れ観・不浄観が希薄になっていくにしたがって恐怖の念は隠され、「愛着の感情」が強調されるようになった。遺影の写真は徐々に大きくなって祭壇の中央に安置され、棺の上には故人の愛用品や好きだった食べ物、孫などの手紙などまで置かれるようになっていく。葬儀会館の会場では、死者の人生を紹介する在りし日の写真を展示したりプロジェクターで投影することも、ごく普通に行われようになった。死者は、もはやホトケ（仏）ではないのである。

おわりに

愛知県の事例から葬儀の変化について、Ⅰ. 昭和30年代までの葬場中心の葬儀、Ⅱ. 昭和40年代から60年代までの自宅葬儀、Ⅲ. 平成以後の葬儀会館での葬儀という時期区分をして、葬儀の「場」の変化から葬列の消滅、霊柩車の発生、葬儀会館の成立、祭壇の成立と変化、葬具の変化と儀礼の消滅、そして「死」や死者観念の世俗化について述べた。

「世俗化」とは、一般社会の中で宗教性が失われていき変容していく現象のことである。

家族や近隣の地域共同体が葬送を執行していたころの儀礼は、民俗信仰であれ仏教信仰であれ、まちがいなく宗教儀礼であった。「死」は不可解な畏怖すべき現象であり、遺骸を葬り、遺骸と分離した靈魂観念に支えられて死者を「あの世」「浄土」などの他界へ送ることが必要であった。ところが、関沢氏や山田氏が指摘していたように現代の葬儀では、死者は遺骸と死霊ではなく死体になってしまった。もはや死後の世界へ旅立たせることなく、個人として記憶される親愛なる存在になっている。葬儀を執行する主体は葬祭業者に完全に变化してしまったが、葬祭業者は遺族のニーズにしたがって葬儀を演出したり儀礼を行っているにすぎない。葬祭業者の葬送に関する行為や儀礼は、けっして伝承されたものではなく、伝承されるものでもなく、単なる「商品知識」である。葬具や儀礼全体の宗教的意味は喪失した。

このような現代葬儀について、内藤理恵子氏は「消費文化と化した日本の葬送文化」と捉え、遺族の「ユーザー」としての意識、「ニーズを察知した葬送業者の商品開発」、「読経サービス」の商品化、「供養そのものをアウトソーシング」しているという。葬儀は、死者に対する追憶主義的なイベントになった。そして、最新のニューデザインの墓石、手元供養、インターネット供養、ペット供養まで調査して、アニメ、漫画、ゲームが新しい他界観を創出しているとまで述べている⁽¹⁴⁾。こうした内藤氏の葬儀に関する記述には驚きながら教えられることもあるが、はたして「葬儀とはなにか」、「死とはなにか」が本質的にわからず、「消費や流通を媒介にしたバーチャルな共同体によって担われた葬儀⁽¹⁵⁾」の先になにがあるのか不透明である。それは、現代葬儀に葬祭業者の存在は不可欠であるが、葬祭業者の行なう儀礼が民俗なのか、サービスであって儀礼自体に意味があるのか、という疑問もでてくるのである。いずれにしても、葬儀の変化はまだ進行中である。山田慎也氏が着目した彫刻祭壇や半輿の「棺かくし」なども、名古屋では依然として飾られているが、東京や大

阪ではほとんど姿を消している。

最後に、実見した東京の葬儀について触れておきたい。平成23年(2011)10月26日、男性Aが享年79歳で死去した。通夜は10月31日、葬儀は一週間後の11月1日であった。葬儀会場は自宅近くの臨海斎場(東京都大田区東海)であった。東京では火葬場がいっぱいで死亡してもすぐに葬儀は行えず、一週間から十日待ちの状態であるという。臨海斎場は大田区・港区・世田谷区の3区共同の公共施設で火葬場と葬儀場が併設されている。火葬は四つ、付属の葬儀会場は4部屋であった(写真13)。故人は病院で亡くなったが、遺体は高層マンションである自宅に戻され、それから葬祭業者によって血を抜き防腐剤を入れるエンバーミングの処置が施され、さらに臨海斎場内の冷凍庫で通夜当日まで保管された。祭壇の様子(写真14)をみると、名古屋のように聖殿風の半輿はなく、遺影を中心にした花祭壇の型式であった。位牌と遺影の上に小さな阿弥陀絵像の本尊が安置されていたが、このほ



写真13 臨海斎場(東京都大田区)



写真14 東京の花祭壇

かにはまったく宗教色がない。シカバナや六道をあらわす六灯はなく、花も檜はなく色花ばかりであった。棺の上に置かれる七條袈裟や金襴の覆い(棺覆袈裟)もなく、棺は丸裸であった。卓台の花瓶・香炉・燭台もごく普通のものである。葬儀は社葬という一面もあったので、会葬者が多かった。しかし、通夜での読経が終わると会葬者はほとんどいなくなる。会葬者は焼香が済むと、そのまま二階の別室に用意されている立食会場に移動してしまうので、読経直後には親族以外誰もいなくなってしまうのである。反対に、葬儀が終わって最後のお別れとして花を棺に入れるときは、一般会葬者が行列して一人ひとり行われた。名古屋では親族だけである。

葬儀が終了すると、すぐに隣接する火葬場へ移動、そして拾骨となったが、骨の拾い方が違う。ステンレス製の箱に移された遺骨は、マスクをした係りの者が小さな刷毛を使って、骨片どころか塵ひとつも残さぬように全骨が骨壺に入れられた⁽¹⁶⁾。周りの親族は、息を呑むように注視していたが、それは儀式といってもよい光景であった。拾骨が済むと、愛知県では通常初七日法要となるが、東京では初七日法要をこのときしないという。葬儀会場となった部屋はすでに他家の葬儀会場とな

り、控え室などでは一切焼香や蠟燭に点灯することが禁止されているからであった。

こうした東京における葬儀をみると、愛知県の葬儀とはことなり、また旧来の葬儀とはまったく異なった様式になってしまったと指摘できる。繰り返しになるが、「死」や遺体観念は変化し、死者はもはやホトケ（仏）ではなくなったのである。

註

- (1)——『国立歴史民俗博物館調査報告書 9 死・葬送・墓制資料集成』東日本編 1 (1999 年), 巻頭。
- (2)——関沢まゆみ「葬送儀礼の変化—その意味するもの—」(国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在 民俗の変容』, 吉川弘文館, 2002 年), 206～7・223～4 頁。
- (3)——山田慎也『現代日本の死と葬儀』, 東京大学出版会, 2007 年, 3～5・28・269～282 頁。
- (4)——烏田裕巳『葬式は、いらない』(幻冬舎, 2010 年)以後, 仏教教団側から発言が行われている。岩田親静「葬式仏教再考—烏田裕巳の批判を受けて—」(『現代宗教研究』第 45 号, 日蓮宗現代宗教研究所, 2011 年), 鈴木隆泰『葬式仏教正当論』(興山舎, 2013 年), 北塔光昇『仏教・真宗と直葬—葬送の歴史と今後—』(自照社出版, 2013 年)など。
- (5)——註 (1) 東日本編 2, 筆者が担当した報告。
- (6)——『一柳葬具総本店 創業百年史』一柳葬具総本店, 1977 年。
- (7)——真宗佛光寺派蔵の葬送史料「二十一世寛如上人無量覚院殿／御葬礼之式／並以後之次第 明和第七庚寅年／夏閏六月十九日」に「青門」とある。拙稿「佛光寺門主の葬送儀礼」(『佛光寺の歴史と文化』法蔵館, 2011 年)。
- (8)——註 (3)。
- (9)——同右。
- (10)——註 (6)。
- (11)——「花祭壇」は「生花祭壇」とも呼称されるが, どういった祭壇形式に対して呼ばれるのか定義は定まっていない。
- (12)——葬祭業者「のいり」(愛知県一宮市)のパンフレット『EMBALMING エンバーミングのご案内』。
- (13)——同右。
- (14)——内藤理恵子『現代日本の葬送文化』(岩田書院, 2013 年)。
- (15)——註 (3) 325 頁。
- (16)——愛知県における全拾骨と一部拾骨については, 拙著『真宗民俗史論』(法蔵館, 2013 年)の第 4 章第 3 節「尾張・三河における真宗民俗の位相」で詳しく述べたので参照のこと。

【付記】

本稿は『愛知県史別編 総説 民俗 1』(愛知県, 2011 年)第 2 編第 2 章第 3 節に 発表掲載した「葬儀の今昔」を再構成し, 新たに資料を追加して成稿したものである。

(同朋大学仏教文化研究所客員所員, 国立歴史民俗博物館研究協力者)

(2013 年 12 月 21 日受付, 2014 年 5 月 26 日審査終了)